



50周年記念の建立

【石碑裏側に刻まれた文面】

本校は郡下の農業振興を図って大正九年四月郡立の長野県下伊那農学校としてこの地にあった鼎小学校稲井分教場を仮校舎にして開校された 翌十年七月現校舎（※旧校舎）が竣工したのでこれに移り十一年四月県立に移管されさらに昭和二十三年四月学制改革によって長野県下伊那農業高等学校となって今日に至る

創立五十周年記念祭の挙行に当たり学校同窓会PTA相謀り初代校長芝原彦十先生揮毫による碑を建立し本校発祥の地を永く記念する

昭和四十五年十一月八日 記念式典の日

(1970年)



大正9年（1920年）開校始業、郡立下伊那農学校 創立当時の仮校舎 鼎小学校稲井分教場

「沿革50年の歩み」より

# 創立期の社会状況と創立の経過

## 1 創立前後の社会状況

下伊那農学校の設立されたのは、大正9（1920）年4月。当時の本郡総人口16万8000余人。総戸数3万1000戸余。うち72%の2万3000戸が農業で、養蚕農家1万7000戸余、専業農家も1万5700戸余で、7割に近かった。全郡の年間農産物価額は1400万円余。うち蚕繭価額が6割近い848万円。工業生産1930万円の中心も、生糸・絹織物関係で、まさに養蚕王国の時代であった。それに創立前年までは、高値の生糸から全国的にも好況で、第一次世界大戦勝利の余波も残り、全国的に実業教育拡充の施策が活発な時代であった。

当時大正8年までの県立甲種農学校は、小県蚕業高校（現上田東）・上伊那農学校・木曾山林学校の3校のみで、その他の農学校は乙種の郡立または組合立学校であった。本郡には、大正2年創立の乙種竜東農蚕校だけであった。大正9年の本郡下中等校卒業生総数は、普通系中等校のみでわずかに221人。旧制高校・大学のそれは26人と記録されており、旧制中等校教育の門戸は、きわめて狭い時代であった。本郡の場合は、飯田中学・同高女の2校のみで、農業教育希望者は遠く愛知県の安城農林、郡外の上伊那農・小県蚕業・木曾山林校に学び、同年の郡外校在生徒数は66人を数えるという時代であった。

当時は、農蚕の盛況を背景にした教育拡充というだけでなく、時代はまた、いわゆる大正デモクラシー・大正リベラリズムと呼ばれる、民主自由の曙光曲折の時代ともなっていた。理論的には吉野作造の民本主義や美濃部達吉の天皇機関説が説かれ始めた時代相が、本郡にも次第に影を濃くし、青年会の自主化運動から北原白秋・太田水穂らの来峡文芸活動、左翼青年層の下伊那文化会発足から自由青年連盟への動き、そしてL. Y. L（自由青年連盟）等の時流に対抗する国民精神作興会の発足などなど、政治的思想的にも相克変革の時代を迎えていた。

## 2 下伊那郡長の設立意見から

この時代における地方官治の中心は、県知事の任命による郡長の権限が強大であり、その施策の基本は、郡会議員による郡会の決定が支配的であった。

内外情勢の進展と、地域各界における実業系教育施設の設立機運を反映して、当時の下伊那郡長鈴澤卯吉が郡会に提出した意見書が、本校創立期の事情とその必要性を克明に説いている。

## 3 設立当初の建築費など

### 〈建築費概算〉

総計	金11万425円
第1年	金5万5277円50銭 本校舎 体操場 生徒昇降口 小使室 便所 物置 玄関 廊下 井戸等
第2年	金1万9700円 寄宿舎 食堂 賄所 農具舎雑庫 便所 廊下 蚕室 門等
第3年	金3万5447円50銭 普通教室 廊下 昇降口 収納室 堆肥舎 鶏舎 豚羊舎 燻烟室等

### 〈経常費〉

総計	金5万5454円50銭
第1年	金1万7555円78銭
第2年	金1万8275円78銭
第3年	金1万9622円94銭

#### 4 設置をめぐる見解対立

こうした諮問を受けた当時の郡会の構成は、村部から36名、飯田町部から4名の議員構成であり、合意は設立位置をめぐる難航した。郡会は、「農商学校諮問審査委員」次の9名を各界より選出した。

遠山方景・山崎清一・坂牧直助・江塚善三・野原半三郎・松村正実・関島喜代・萩元茂市・久保田巧

慎重論議の末に、委員会は設置位置を「飯田町モシクハ其附近ニ設置」と修正し、農商学校は原案通りとして答申した。しかし郡長側は、当時郡庁舎の建設計画もあって財政支出に難渋しており、位置を飯田町として町部側に財政負担を多く依存しようという見解と、学校を農業課程のみとする村部側意向との調整に苦慮した。郡長は、有力者から成る郡参事会（久保田巧・江塚善三・坂牧直助・松村正実・伊藤藤太郎）の意向を求めた上で、同年9月開催の臨時郡会に、次の提案を行っている。

〈下伊那郡会議案第六号〉

甲種程度実業学校設置ニ関スル件

下伊那郡ハ大正九年度ヨリ左記計画ヲ以テ甲種程度農学校ヲ設置スルモノトスル  
記

- 一、位置 下伊那郡 鼎村
- 一、校地校舎等ノ設備  
大正九年度ハ仮校舎ヲ以テ開校シ同年度ヨリ三ヶ年継続事業トシ生徒百五十名ノ予定ヲ完成ス
- 一、設立費 経常費臨時費トモ郡費支辨トス

この提案をめぐる、多くの見解が対立した。「郡会は議論沸騰し、5日間にわたる臨時郡会は、農学校設置問題郡会の観を呈した」と報ぜられている。郡会は、「農学校に関する審査委員会」委員小笠原孝三郎・原梅次郎・松下四郎・関島喜代・野原半三郎・篠田庄三郎・松尾初太郎・平澤武次郎・吉澤孝三郎に審議を付託。ようやく原案の採択となった。

しかし翌9年2月の通常郡会でも、農学校設置の予算審議で、両論の再燃を見たが、激論の後に9年度分学校運営経常費1万1418円60銭。建設臨時費9万1418円が議決され、同年2月12日付にて「農学校を鼎村に設置 4月1日より開校」との公表となった。続いて3月8日文部省告示第96号により「長野県下伊那郡鼎村に農学校規程甲種程度による長野県下伊那農学校を設置、大正9年4月より開校の件認可せり」との正式決定を見たのであった。

## 5 開校と校舎施設の経過

許可を受けたほぼ10日後、下伊那郡長は喜びに包まれながら、次のように学則を定めて告示。これに沿って生徒募集・入学試験が行われた。入試は5科目、授業料1ヵ月が2円であった。

〈下伊那郡告示第八号〉

長野県下伊那農学校学則左記ノ通り定ム  
大正九年参月拾七日

下伊那郡長 鈴澤 卯吉

### 長野県下伊那農学校学則

#### 第一章 総 則

第一条 本校ハ農業学校規程甲種組織ニ依リ農業ニ従事セントスル者ニ須要ナル教育ヲ施スヲ以テ目的トス

第二条 修学年限ハ三ヶ年トス

第三条 生徒定員ハ百五十名トス

#### 第二章 学年学期及休業日

(三ヶ条省略)

#### 第三章 学科程度及毎週授業時数

第七条 学科目及其ノ課程並ニ毎週授業時数左ノ如シ

(省略)

#### 第四章 入学退学

(一ヶ条省略)

第九条 入学志願者ハ左ノ各項ニ該当スル者タルベシ

一、品行方正ニシテ農業ニ従事セントスル志願確實ナルモノ

一、年齢十四歳以上ノモノ

一、身体健全ニシテ正規ノ課程ヲ修ムルニ足ルベキモノ

一、修学年限二ヶ年ノ高等小学校卒業ノモノ又ハ之ト同等以上ノ学力ヲ有スルモノ

第十条 入学志願者ニ対シテハ体格検査ヲ行ヒ高等小学校卒業程度ニヨリ国語、算術、理科、地理、日本史ノ五科目ニ就キ入学試験ヲ行フ

第十一条 修学年限二ヶ年ノ高等小学校卒業ノ者ハ時宜ニヨリ他ノ入学志願者ニ先立チテ入学セシムルコトヲ得但シ志願者募集人員ニ超過スルトキハ国語、算術ノ二科目ニ就キ選抜試験ヲ行フコトアルベシ

(以下九ヶ条省略)

#### 第五章 成績考査

(四ヶ条省略)

#### 第六章 懲戒及賠償

(二ヶ条省略)

第二十七条 生徒ニシテ校物ヲ毀損シ又ハ紛失シタルトキハ情状ニヨリ現品又ハ其代価ノ一部若クハ全部ヲ賠償セシムルコトアルベシ

#### 第七章 授業料

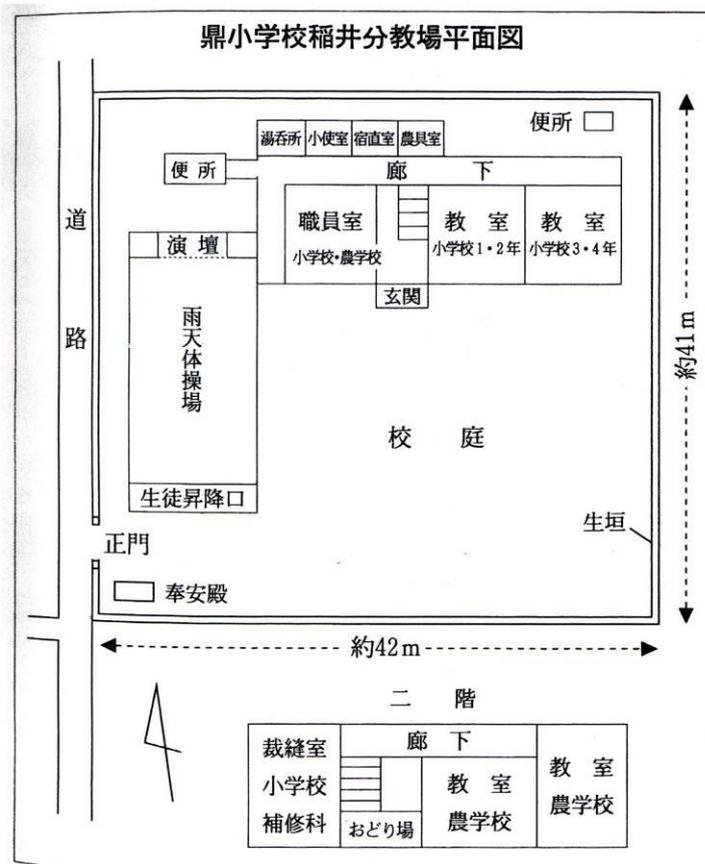
第二十八条 授業料ハ一ヶ月金貳円トス 但シ八月ハ之ヲ徴収セズ

(二ヶ条省略)  
 第八章 寄宿舍  
 (二ヶ条省略)  
 第九章 研究生  
 第三十三条 本校ヲ卒業セルモノニシテ特ニ農業ニ関スル事項ヲ研究セントスルトキハソ  
 ノ希望ニヨリ研究生トシテ之ヲ在学セシムルコトアルベシ  
 (四ヶ条省略)

以上

校舎には、県小学校の稲井分教場が仮校舎とされ、4月9日付にて香川県農林学校教諭の濱島彦十（後の芝原彦十先生）が任命されて、大正9年4月21日、待望の開校式を迎えている。当日の来賓は、鈴澤郡長・郡会議員はじめ各界多数の代表で、出席の生徒保護者を含めると、およそ80名。第1回の入学生は45名。厳粛盛大にとり行われたと記録されている。

当時の分教場は、図面の通り2階建6室の本館と体操場及び運動場があつて、



県村の稲井集落の小学4年生までが学んでいた。農学校には、初年度2階の1教室のみで、職員室は小学校と同室という状況であった。

職員は濱島校長の外、

- 教諭 三輪貞三（物理、数学等）
- 教諭兼舎監 小林 潔（化学、土肥等）
- 教諭兼舎監 鈴木廉三（英語、養蚕等）
- 書記兼教授囑託 熊谷春治郎（国語）
- 校医 松井卓治
- 農夫兼小使 寺島新太郎
- 農夫兼小使 寺島たかえ

であった。なお年度途中で次の増員が行われた。

- 教諭 山田俊雄（作物、園芸等）
- 教授囑託 関島 清（体操、教練）
- 武術教師 新田輝忠（剣道）
- 助手 飯島武男（博物、畜産等）

下伊那農学校が、郡下の絶大な期待の下できわめて不十分な施設状況ながら、呱呱の声をあげたのが、旧鼎村、名古熊集落の高台稲井であったことから、いつしか稲井ヶ丘という名称が生まれ、この地に学ぶ若者たちに、稲丘健児という呼称が定まってきたのだった。

濱島校長は、上伊那郡東春近村の出身で、当時の県学務課長佐藤寅太郎の推挙による着任であったが、当時の伊那電鉄は郡境の高遠原までの開通であり、同駅からようやく一台の人力車をみつけだしての、開校式前夜の飯田到着、というあわただしさであったと伝えられている。

濱島校長は着任後（芝原への改姓は大正13年7月1日）4月21日を開校記念日と定め、5月には校友会の発足。厳格な「校訓」の制定。6月からは校地の造成事業。10月には、「教育勅語頒布三十周年記念」として、職員生徒が各一本ずつ樹木を持ち寄っての「観賞樹木園」の設置。翌11月には校歌の制定。「明治神宮鎮座祭記念」として、職員生徒1人あたり金50銭の積み立て。翌10年には、初年度の補欠入学者を含めた49名の入学に対し、出願者81名、入学許可者54名という活況を迎えたのだった。同年6月には、東京美術学校に委託しての校章の制定。同月には電話の架設工事も完成。その番号は懐かしい「飯田550番」であった。

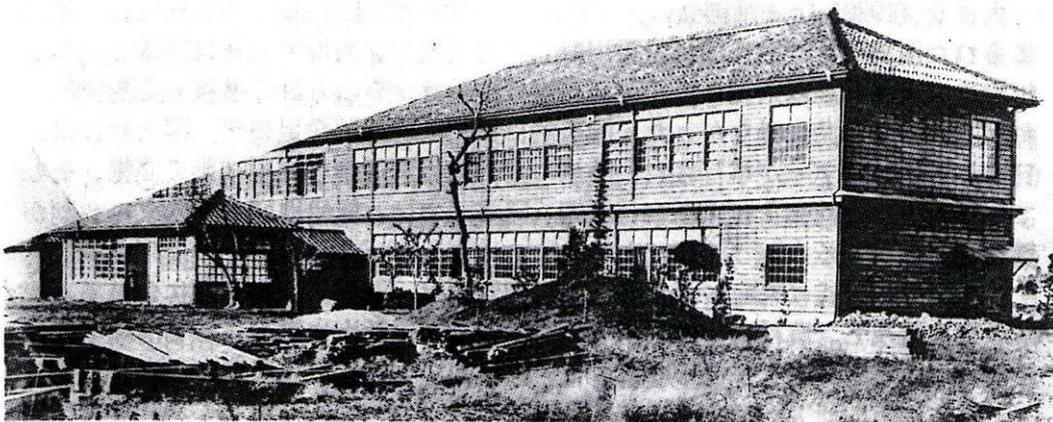
寄宿舍には、鼎村上茶屋の福澤久三郎方の蚕室を借用。授業は開校式翌日から開始された。実習地には、はじめ水田約2反9畝・畑約4反5畝を借地。農場実習は桑樹の抜根作業・普通畑の造成作業から始められている。まさに校舎は仮校舎・寄宿舍は借家、そして実習地造りという学校創造の活動は、「開拓者精神」の営みであった。本校の伝統精神の一つ、「質実剛健」の理念は、濱島校長の下で、こうして培われたのであった。

## 6 本館校舎建設と県立移管

郡会議決の3ヶ年計画予算によって、初年度およそ3000坪の校地を買収、9年6月より造成工事開始、翌10年1月地鎮祭、5月には上棟式と順調に進展。7月には岡田忠彦県知事が視察来臨されるという、熱の入れようであった。今は姿を消したが、数多い旧制同窓生の学び舎となった、あの戦前の木造旧校舎は、次の年度と財政によって建築されたのだった。

大正9年度	3万6750円	本館及び公仕室	宿直室	便所	物置小屋	
大正10年度	5万4460円	理科室	寄宿舍	炊事場	食堂	蚕室
大正11年度	2万0160円	体操場兼講堂	農具室	肥料室	更衣室	

こうして大正10年7月28日、当時の在校生1、2年約100名は、真新しい本校舎に移転。



建設された本館校舎の景

職員も、西村治巳（法制・作物）教諭 神谷慊哉（林業・数学）教諭 書記 長谷川成美の3名の増員となり、学校長他、14名という構成となった。その年11月24日には、岡田忠彦県知事を迎えて、来賓他200名余の参列で盛大な落成・新校舎開校式の挙行となった。この日は、下伊那郡役所の新開庁式も行われ、同夜は、祝賀のちょうちん行列が飯田町内を練り歩くという盛観の日であった。

あらためて感謝したいのは、こうした一連の学校建築施設拡充の財源が、全郡下の町村のご協力によって行われ、一連の整備事業に先輩在校生の汗の努力が注がれたことである。この年、実習地も拡張買収されて約1町3畝、水田も購入されて約6反4畝が入手され農業学校としての基礎が固められたのだった。

こうして大正10年10月には、敷地建物の一切の寄付採納願いが県に提出され、同年12月県会にて県立移管の決議成立。翌11（1922）年4月4日付文部大臣より県立移管の許可。生徒定員も150名より300名に増加。在校生も各学年が揃って、全生徒約170名。稲井ヶ丘に創立の県立下伊那農学校は、同年7月7日誇りに包まれて学校の象徴の校旗の制定、その奉戴式を迎えたのだった。

開拓者精神と質実剛健の理念の下で、稲井ヶ丘の地に青春の理想を掲げ鍛え合った、晴れの第一同卒業生36名が、“噫新興の気を負ひて” 実社会に門出したのは、大正12（1923）年3月22日（第1回卒業式）であった。

**現所在地**

長野県飯田市鼎名古熊 2366-4 電話 0265-22-5550  
 東経 137° 49' 41" 北緯 35° 29' 47" 標高 493.029m

今村真直（旧22）

本校八十年学校史より抜粋

